

【修論報告】

ナラティブ分析によるボリス・ヴィアン作品の研究 —文学創作と音楽創作の共通性を中心に—

衛博 (大学院音楽研究科修士課程音楽学専攻2019年度修了)

本研究では、主にヴィアンの文学作品及び彼の音楽作品を研究対象とし、それぞれをナラティブティの研究の方法論を用いて分析した。

ボリス・ヴィアンは誰？

フランスの作家・詩人ボリス・ヴィアン(Boris Vian, 1920–1959)は『うたかたの日々(L'Écume des jours)』(1946)、『北京の秋(L'Automne à Pékin)』(1947)など前衛的な作風の小説により、第二次世界大戦後すぐにフランスの文壇に確固たる地位を獲得した。また、作品は多くの言語に翻訳され、世界的な名声も得ている。作家、詩人、演奏家、批評家、エンジニアなど様々な肩書きを持っている彼は、天才というより「鬼才」と呼ばれるが、僅か39歳で心臓の病気により死去した。彼の真価は死後、さらに脚光を浴びることになった。文学創作、ジャズ演奏及び私生活について、現在でも大きな関心が寄せられており、これら全ての領域を連結させているヴィアンの思想は今日まで大きな影響力を持っている。

ヴィアンと音楽の繋がり

「作家」の他、ボリス・ヴィアンのもう一つの重要な肩書きは「音楽家」であり、なかならずジャズの演奏家と批評家である。ジャズ・トランペット奏者であり批評家でもあったヴィアンは、デューク・エリントン(Duke Ellington, 1899–1974)やマイルス・デイヴィス(Miles Davis, 1926–1991)など、パリを訪ねたジャズ演奏家たちとフランスとの橋渡しの存在として活動し、フレンチ・ジャズの発展に重要な役割を果たしている。また、彼はサンジェルマン・デ・プレにあった幾つかのジャズ・バーの運営に関わった。その中でもヴィアンがオーナーとして運営していた「タブー」というバーは、ジャズ演奏家の拠点であると同時に、社交界の名士や知識人の交流の場となった。また、ジャズ批評家として、ヴィアンは戦時中と戦後、二つの時期にまたがって活躍した。その活動は、単なる批評の発表にとどまらず、フレンチ・ジャズについての重要な論争に関わり、フレンチジャズのメインストリームの確立に大きな影響を与え

た。また、戦時中には、出版者・編集者としての活動を利用し、占領軍と表向きは友好的な関係を保ちながら、レジスタンス・連合軍との連絡の役割を担い、密かに抵抗を行っていた。戦後には、彼は音楽の交流に力を注ぎ、同時に先端的な音楽をフランスにもたらした。ジャズだけでなく、ポップ音楽とロックについても同じであり、「ロックをフランスに導入した最初の人物の一人」と称えられることもある。ヴィアンの文学作品と音楽作品はいずれも彼が心血を注いだもので、命をかけて書き上げたものと言っても過言ではない。彼の影響の下に、パリにあるいくつかのジャズバーはジャズ活動の中心としてジャムセッション¹などを常に開催していた。人々はジャズを聴いたり、議論したり、演奏したりし、50年代にヨーロッパはジャズ黄金時代を迎えた。



左から、ミシェル(妻)、マイルス・デイヴィス、ヴィアン ～『ボリス・ヴィアン伝』●J116-898より～

1 本格的な準備や、予め用意しておいた楽譜、アレンジにとらわれずに、ミュージシャン達が集まって即興的に演奏をする活動である。

ナラティヴとは

ナラティヴとは直接に翻訳すれば、物語と話術などと出てくるが、実はナラティヴが含むのは物語の内容だけではなく、また叙述法、語り手、構造、ロジックなどいろいろある。要するに、人々の語りや物語に着目し、その語りを通してなんらかの現象に迫る実践方法というのがナラティヴである。

ナラティヴを応用するのはまたマクロとミクロで区別できる。例えば構造主義のナラトロジー、メタナラティヴはマクロ的で、ナラティヴの下のトピック論、間テクスト性はミクロ的である。

本研究では、構造主義のナラトロジーと間テクスト性から、マクロとミクロの二つの角度、つまり内容と構造からヴィアンの文学創作と音楽創作の共通性を考察していった。

泣くに泣けず、 笑うに笑えないブラックジョーク

研究の結論としての一つ、ブラックジョークは基本的に二つの特徴を含む。一つは現実絶望することであり、もう一つは現実絶望に反対することである。

ヴィアンの文学作品にはブラックジョークの痕跡の深いものが多く残されている。短編小説『蟻』のエンディングでは、地雷を踏んでしまい、仲間を先に行かせ、一人で死を待つ主人公が「私はどうしても足を動かすよ。だって、戦争にもう飽きた。だって、脚が痺れて、蟻が這っているようだ」と文句を言った。彼が死ななければならない理由は「戦争に飽きた」そして「脚が痺れた」からである。前者は戦争に対する抵抗を表す正当の理由であるが、後者はしようもない理由として、人々を笑わせながら絶望感を作り、喜劇で悲劇を表現する素晴らしいブラックジョークのシーンである。

ヴィアンの音楽作品にももちろんブラックジョークの場面が多い。例えば彼のシャンソン作品『僕はスノッブ(J'suis snob)』である。曲全体はスイングとバラードが交替して進行し、テンポも速くなったり、遅くなったりする状態であり、スノッブの若者たちの激情があり、ロマンチックな夢もある生活をはっきり描写している。しかし、華やかな生活は彼らの無知を覆い隠すことができない。「イタリアのネクタイを付けるが、虫に食われたスーツも着ている。上品な人みたいに映画館に行ったが、わからないスウェーデンの映画を見ていた。毎日馬に乗るが、実は馬糞の匂いが好きなのである。男爵夫人しか訪ねないが、相手の名前がトロンボーンみたいと思っていた」など、当時のスノッブたちをユーモアたっぷりに皮肉っている。歌詞の最後でスノッブの「僕」はジャガー乗車中に事故に遭う。死ぬ前の最後の一言「ディオールのシュラウド²がほ

2 死体を覆う白い布。

えい はく ● 中国・寧夏回族自治区・銀川市出身。静岡大学卒。ソルボンヌ大学博士課程に入学する予定。
ジャズ中毒、フランス派超現実主義バスケット選手である。



トランペットを吹くヴィアン ～『ボリス・ヴィアン伝』●J116-898 より～

しい』(原文:J'veux un suaire de Dior.)はスノッブの人が既に救いようがないところまで来ているといった失望を表現している。この泣くに泣けず、笑うに笑えない書き方は皆の微苦笑を誘ったが、スノッブを蔓延らせるような社会のありように対しても人々の問題意識を向かわせるものでもあった。

終わりに

改めて振り返ると、ボリス・ヴィアンは作家として世界中で有名であるが、フレンチ・ジャズの歴史でも一翼を担った人物である。彼の文学と音楽に対する理念は時代の環境の下、絶えず変化しており、時に過激であったが、やがてフランスの文壇と音楽界の発展を後押しし、不滅の功績を打ち立てた。そして、ボリス・ヴィアンの文学創作と音楽創作における共通点は非常に多い。それはヴィアン自身の価値観、人生観、世界観と関わる。のみならず、歴史観や社会観などの観念から考察すればまた別の結論を得ることができるとも思われる。しかし本研究においては主に内容と構造からヴィアンのナラティヴを分析することを通して、彼の作品創作のイメージは進歩的であり、且つ感情を自由に表現することができ、現実の束縛を打破できるものであることをよりはっきりと理解することができた。

興味があれば、ぜひボリス・ヴィアンの文学作品と音楽作品を楽しんで欲しい。

<参考文献>

- *『間テクスト性:文学・文化研究の新展開』グレアム・アレン著 森田孟訳 研究社 2002 ●当館未所蔵 TAC:東京外国語大学ほか
- *『「語り」の諸相:演劇・小説・文化とナラティヴ(研究叢書 中央大学人文科学研究所編;45)』中央大学出版部 2009 ●当館未所蔵 TAC:ICUほか
- *『ボリス・ヴィアン伝』フィリップ・ボジジョ著 浜本正文訳 国書刊行会 2009 請求番号●J116-898
- *『蟻(しびれ)』ボリス・ヴィアン著 なた・いなだ訳 『ブラック・ユーモア選集 第6巻 外国篇:短篇集』早川書房 1976 ●当館未所蔵 TAC:東京経済大学